

# Small is still beautiful.

成城大学名誉教授 村本 孜(むらもと つとむ)



Small is beautiful.という言葉がある。F.シューマッハーが1973年に刊行した書物のタイトルである。彼は、1911年のドイツ生まれで、イギリスで活躍した経済学者・哲学者である。ドイツではシュンペーターに学び、渡英後ケインズに師事した。ケインズは自らの後継者の1人としてシューマッハーを挙げていたという。1940年に敵国人として職を追われ、収容されたこともあった。収容中に書いた国際決済に関する論文は、ブレトン・ウッズ会議におけるケインズ案の基になった国際決済メカニズムに関する構想であった。その論文をケインズに送り、1941年末にはケインズと議論をし、ケインズ案として結実したという。

その後、石炭公社に長く勤務し、その経験と経済学者としての分析から、石炭及びその代替燃料としての石油の枯渇を予測し、原子力の利用についても警鐘を鳴らした。1973年の著書「Small is beautiful.」は、エネルギー危機を予言し、同年に起きた第1次石油危機としての的中したことで世間の注目を浴び、各国語に翻訳された。

シューマッハーは、エネルギー危機を予言したほか、大量消費を幸福度の指標とする現代経済学と、科学万能主義に疑問を投げかけた。消費主義と経済拡大主義を、人間の本性に戻ってチェックしない限り、人類は破滅に向かうというのが彼の主張だ。豊かさの追求は幸福に繋がらず、むしろ限られた自然資源の枯渇を招き、無軌道な環境汚染・破壊に繋がったのではないかとする。「よりよい社会を築き、よりよいシステムを達成しようとする者なら、単に「上部構造」(法律、規則、契約、税制、福祉、教育、保険サービスなど)を改革しようとするだけではいけない。…それよりも、基礎であるテクノロジーが変化しないかぎり、上部構造に本格的な変化は起こりそうにないのである。」と指摘した。根本にあるテクノロジーとは「新しい型のテクノロジー(小国の国民にも高い生産性を与え、その人びと

をある程度まで自立させられるようなテクノロジー)」で、それが「身の丈にあったテクノロジー」であり、「小規模性、単純性、安上がりの資本、非暴力」の4つの目標の達成が重要とした。

彼は、「大」は常に善か、という問いに、人間のサイズに合致した「小」の美を訴え、人間の英知と経済学を結び合わせ、人間中心の経済学の必要性を主張した。経済、政治、社会の規模が大きくなればなるほど、人間は非人間化し、結局は人間疎外を招くことになる。「大は小を兼ねず」と主張した。科学・技術の発展には新しい方向、すなわち「人間の背丈に合わせる方向」を与えるべきで、「人間は小さいものである。だからこそ、小さいことはすばらしいのである。Man is small, and, therefore, small is beautiful. 巨大さを追い求めるのは、自己破壊に通じる。To go for gigantism is to go for self-destruction.」というフレーズがシューマッハーの経済哲学の考え方を表している。

このシューマッハーの考え方は、1970年代のラディカル経済学やローマクラブの『成長の限界』などを背景に持つので、時代の産物ともいえる。しかし、近年、「Small Is Still Beautiful.」という書が刊行されている。著者のJ.ピアースは、イギリス生まれのカトリック思想家で、シューマッハーの主張を支持し、現代経済学を批判し、個人・地域社会・政府段階での多様なソリューションを掲げ、大規模な経済よりも小規模な経済を良しとする。注意したいのは、ピアースの書は、シューマッハーの要約に留まるのではなく、かつ1970年代の社会正義ではなく、現在の環境社会正義・環境汚染反対にも意味のある主張をしている点である。ピアースの思想の背後には、1891年の「ルールム・ノヴァルム」以来のカトリック教会の社会回勅の流れがあるが、何れにせよSmall is beautiful.は死なずである。